

自然会話における「デハナイカ」と “不是…吗”の表現機能の違い

張 恵芳

要 旨

表現形式が会話の流れの中で使用される動機付けまたは効果のことを「表現機能」と呼ぶ。本稿の目的は自然会話に現れた「デハナイカ」と“不是…吗”の表現機能の違いを明らかにすることである。発話順番交替規則を基準に三種類の表現機能を設定した：(A)話題の提示・展開機能；(B)確認要求機能；(C)評価・感想の表示機能。若い世代の女性友人同士の雑談データに現れた「デハナイカ」の使用頻度は同条件のデータに現れた“不是…吗”の4倍近くで、機能Aが大半を占めている。一方、“不是…吗”には、機能Cのものが見られなく、主として機能Bを果たしている。その違いが生じる原因を日中両言語の話題の展示・展開の仕方の違いから分析し、日本語教育や中国語教育で「デハナイカ」と“不是…吗”の会話における表現機能を教授することも重要だと指摘した。本稿の研究手法はモダリティに関する日中対照研究の新たな試みである。

キーワード

確認用法 表現機能 デハナイカ 不是…吗 自然会話 日中対照

1 先行研究の概観と問題提起

日本語のモダリティ研究の隆盛に伴って、モダリティに関する日中対照研究も近年、盛んに行われてきた。

「デハナイカ」と“不是…吗”はそれぞれの言語において否定疑問形的一种とみなされ、形式と用法において、ほぼ対応しているとされている (大西 1989、井上・黄 1996、曹 2000、劉 2009 等)。例えば、

- (1) a. 「今さら何を言うんだ。お前が結婚したいって言ったんじゃないか。」
b. “事到如今你说什么呀！不是你说想要结婚的吗？”
- (2) a. “哟，这不是兰香吗？你怎么来了？”
b. 「あら、蘭香ちゃんじゃない。どうしてここにいるの？」 劉(2009: 74)

今までの先行研究は意味そのものの対応関係を中心としてきた。主に単一の文が分析対象で、表現形式が含まれる文を中心に、その用法と意味または類似点と相違点が論じられ

てきた。また、聞き手の存在を要求する用法の研究および対照研究では、小説の会話文や映画やドラマのシナリオなど、創作された話し言葉のデータに基づく研究が主流となっている。

しかし、同じ会話条件を設定して、データを採集し調べた結果、「デハナイカ」の使用頻度は“不是…吗”の4倍近くになるという結果が現れた。会話における両者の用法は両方とも基本的に「確認用法」である¹ということを見ると、使用頻度の違いは用法の違いによるものもあるが、表現形式の会話における表現機能の偏りによるのではないかと考えられる。

本稿は両形式の会話における表現機能に注目し、対照研究を試みる。

「表現機能」とは、会話において、表現形式が使用される動機付けまたは効果のことを指す。即ち、会話の流れの中で何のために「確認用法」が用いられるのかということである。

2節においては、データの概要を提示し、会話に現れた両表現形式の変異形を洗い出す。3節においては、「デハナイカ」と“不是…吗”の表現機能をより詳しく分析する。4節においては、両表現形式の使用頻度と各表現機能の比率を比較し、その違いを明らかにする。5節では、その違いが生じる原因を探る。6節において、新たな対照研究手法は、日本語教育や中国語教育において、どのような意義を持つのかを説明し、7節で総括をする。

2 データの概要および比較対象の認定

2.1 データの性質

データは、日本語も中国語も若い世代の女性友人同士の雑談会話を用いる。日本語のデータは公開されているもので、中国語のデータは日本語のデータに合わせて筆者が新たに採集したものである。但し、会話時間は、日本語より倍以上長くした。それは、事前調査で、中国語の表現形式の使用頻度が非常に低いということが判明したからである²。データの概要は表1のとおりである。

¹ 「確認用法」とは、「話し手が自分の判断について相手の確認を求める」(国研1960:109)用法のことである。張(2010)では、会話に現れた「デハナイカ」の98%が「確認用法」であるという結論を出している。“不是…吗”について調べた結果、100%が「確認用法」に属しているという結果が現れた。「デハナイカ」の「確認用法」に関しては、蓮沼1993,1995、三宅1996、宮崎2005等が詳しい。

² 本稿は両表現形式の使用頻度を主な比較対象としているので、データの長さという条件がそろっていても差し支えない。

表1 データの概要

	『20代日本人女性データ』 (データ(1)と略す)	『中国人女子大生データ』 (データ(2)と略す)
データ内容	『BTSによる多言語話し言葉コーパス—日本語会話1(日本語母語話者同士の会話)2007年版』(宇佐美まゆみ監修)	『中国人女子大生雑談コーパス』(筆者作成、2009年9月北京語言大学にて録音)
話者の関係	20代女性友人同士(関東在住中心)(話者はIF01~IF10とJF11~JF20になっている)	18~20歳女性友人同士(共通語による会話で、話者の出身は限定しない ³⁾ (話者はC01~C20になっている)
会話の方式	雑談	日本語と同様 ⁴⁾
話者の数	2(1会話の話者数)×10(組)=20人	日本語と同様
会話時間	19分(1会話の平均時間)×10(組) → 187分50秒(総会話時間)	39分(1会話の平均時間)×10(組) → 391分19秒(総会話時間)

また、補充データとして、日本人母語話者と中国人日本語学習者の『接触場面データ』(データ(3)と略す)⁵⁾を使うことがある。それは、中国人学習者の使用状況を説明する時のみ用いる。

2.2 比較対象の認定

「デハナイカ」には、文体や方言、イントネーションの上での、様々な変異形がある。例えば、「ではありませんか」「じゃありませんか」「じゃない(か)」「じゃない(の)」「じゃん(か)」「やないか」「やん(か)」といったものである。本稿で取り扱うデータからは、多数の「じゃん」、少数の「じゃない」、わずかの「じゃないの」と「じゃないか」が現れた⁶⁾。

³⁾ 被験者の出身は次のとおりである。C01 広西省-C02 湖南省；C03 湖北省-C04 福建省；C05 雲南省-C06 安徽省；C07 四川省-C08 北京市；C09 河北省-C10 河北省；C11 四川省-C12 湖北省；C13 吉林省-C14 遼寧省；C15 北京市-C16 北京市；C17 河北省-C18 河南省；C19 北京市-C20 遼寧省。出身は話者の共通語の使用に影響を与えることはあるが、方言との併用はあるものの、全ての調査協力者が共通語(学校教育)の環境で育ったことを考慮して、今回は出身地を統一しなかった。

⁴⁾ なるべく自然会話に近いデータが取れるように、会話者の寮や公園などの環境を設けた。そして、「共通の趣味や興味のあることについて普段どおりにおしゃべりをしてください。話はどんな方面にとんでもかまいません。」という指示を出した。

⁵⁾ 『接触場面データ』は日本人母語話者 J(女性、25歳、共通語話者)と中国人日本語学習者 C(女性、26歳)による雑談である。二人は同じ大学の同じ研究室の同級生である。学習者の日本語レベルは中級以上、上級未満である。

⁶⁾ 「デハナイカ」と「ノデハナイカ」の分別基準は田野村(1988)に従う。

- (3) IF03: そうすると、もうテープしかないじゃん。
- (4) JF20: おっきいお金を動かすんだよ、とか話を聞くじゃない。
- (5) IF03: お前じゃないか。
- (6) JF18: 自分が一番しっくり行くようにまとめなおすっていう感じに、で、いいんじ
ゃないの？

“不是…吗”にも様々な変異形がある (郭 1987、史 1997、曹 2000)。本稿で扱うデータからは、多数の“不是…吗”、少数の“不…吗”、わずかの“不是…↑”と“不…↑”⁷が現れた。

- (7) C08: 昨天晚上你不是躺下了吗。
(夕べ寝てたじゃん。)
- (8) C02: 对啊，考试的时候不都得有监视器吗。
(そうよ，試験のとき，皆，防犯カメラがあるじゃない。)
- (9) C08: 可是，可是你这考试不是在11月↑。
(でも，でも試験は11月にあるじゃない↑。)
- (10) C17: 哎，你钢琴不十几年↑，很快就能练好。
(えっ，ピアノ暦十数年じゃん↑，すぐできるよ。)

データ (1) とデータ (2) における両形式の使用頻度と形態を表2にまとめる。

表2 「デハナイカ」と“不是…吗”の使用頻度と形態

	デハナイカ	不是…吗
会話時間	187分50秒	391分19秒
使用回数	144例	80例
使用頻度	約1分18秒に1回	約4分53秒に1回
形態	「じゃん」: 104例 「じゃない」: 38例 「じゃないの」: 1例 「じゃないか」: 1例	“不是…吗”: 48例 “不…吗”: 18例 “不是…↑”: 10例 “不…↑”: 4例

⁷ すべての“不是…”という形式が“不是…吗”の変異形だというわけではない。文脈から見て、その後に“吗”が省略されていたり、あるいは、上昇イントネーションによって、“吗”が脱落したりしたもののみ、“不是…吗”の変異形と捉える。“不…吗”と“不…”は、“是”の脱落した変異形と考えられる (郭 1987、史 1997)。従って、“你不觉得很奇怪吗↑”(「おかしいと思わない↑」)のような文における“不…吗”は考察対象にならない。テストとして、“是”や“吗”を入れて意味が変わるかどうかという作業を行った。

3 「デハナイカ」と“不是…吗”の諸表現機能

3.1 表現機能を分ける基準

「デハナイカ」と“不是…吗”の会話における表現機能を考える際、両表現形式をめぐる話者のやりとりを見る手法がある。本稿では、Sacks, Schegloff, & Jefferson (1974) の発話順番交替規則を基準に、三種類の表現機能を設定する。まず、その発話順番交替規則を概略すると、次のようになる。

- (a) 現在の話者が、次の話者を選択した場合、現在の話者は話すのを止め、選択された話者が次に話すことになる。
- (b) 現在の話者が次の話者を選択しない場合、最初に話した人が発話権を得る。
- (c) (a) ないし (b) がない場合、現在の話者が必ずではないが、話し続ける。

会話の流れの中で現れた「デハナイカ」と“不是…吗”は、以上のような話し手から聞き手への働きかけ方の違いによって、次の三種類の表現機能を設定することができる⁸。表現機能の名称と順番交替の特徴を、簡単に羅列すると、次のようになる。

- (一) 話題の提示・展開機能——順番交替が起こらない
- (二) 確認要求機能——順番交替が起こる (a)
- (三) 評価・感想の表示機能——順番交替が起こっても起こらなくてもいい (b, c)

3.2 機能A：話題の提示・展開機能

(11-姉さん) (出典：データ(1))

((JF17が修士課程に入ってから兄弟からの風当たりが強くなってきて、発表の準備とかあって徹夜でやったりすると、という話の後))

01 JF17: で、朝までやってたか[ら、

02 JF18: [うん.

03 JF17: あ、姉さんと[か、

04 JF18: [うん.

→ 05 JF17: 会うわけじゃん↑.

06 JF18: うん.

07 JF17: “へ：：, まだ起きてやってたの↑” [って、

08 JF18: [うん.

09 JF17: そういう時に“たいへんだね”って言った後に、“あっ、でもさ、私が頼ん

⁸ 順番交替の仕方は発話順番規則の現話者からの観点から見れば、過不足ないと思われる。したがって、それを基準にした表現機能に関する三分類も、妥当性を有すると考える。

だわけじゃないもんね、自分で勝手にさ、勉強したいって”、

10 JF18: [{笑い}]

11 JF17: [“大学院に入ったわけだから、そんな可哀相も何もね、言ってあげる必要
ないんだよね” とか言われると

12 JF18: そこまで言うんだ. {笑い}

(12-コンピューターテスト) (出典: データ(2))

→ 01 C17: 我们不是考计算机二级吗.

02 C18: 嗯.

03 C17: 然后我们只复习了 Excel, 我以为我们就报了 Excel, 就只看 Excel, 结果还需要考计算机程序设计的公共基础.

訳(01 C17: コンピューターの二級テストを受けたじゃん.)

02 C18: うん.

03 C17: それで、Excel しか復習しなかったの、Excel だけ申し込んだと思って、Excel しか見ていなくて、結局、プログラミングの基礎知識も出たの.)

(11) において、JF17 が「夜更かしをしていたら姉さんに笑われた」というエピソードを語る流れになっている。05 番に現れた「じゃん」の会話における機能を考える際、次の二つの現象を見逃してはならない。一つは、「朝までやってたから、姉さんとか会うわけ」という内容が、ここで常識として話し手から聞き手に提示されているということである。もう一つは、01、03、05 番の JF17 の発話に対して、JF18 が返す反応として、「うん」などの短い「あいづち的な発話」だけで十分で、しかも普通そのようなものでしかありえないということである⁹。勿論、以上の二つの現象は関連しており、ここで、JF17 は JF18 に確認を求めているというよりも、自分がこれから語ろうとしているエピソードの前置きとして、「じゃん」発話を用いているのである。実際、会話の流れもそのようになっており、「じゃん」は、ある種の「投射 (projection)」¹⁰とみなすことができる。順番交替という観点から見た場合、話し手が発話権を握り、交替させないように働きかけるのが特徴である。

(12) の“不是…吗”に関しても、同じことが言える。「自分がコンピューターのテストを受けた」という話題を持ち出し、そのテストについてさらに語っていくというのは C17 が“不是…吗”を使うねらいである。「確認」よりも、「話題の提示」機能の方が顕著である。また、次の(13)が示すように、一つの話題の中で「デハナイカ」発話が盛り込まれるケースもあり、その際、話題をさらに展開していく働きが見られる。

⁹ 「えっ、お姉さんがいるの↑」などのような発話もありうるが、ここでは、このような普通でない場合を除く。

¹⁰ 「語りの前置き」(story preface) と呼ばれることもある (Sacks1974、Jefferson1978 等)。

(13-アイヌ人) (出典: データ(1))

((JF11 は JF12 に金田一春彦のお父さんがアイヌ人の女の人にアイヌ語を教えてもらっていたと話している。その続きで、))

01 JF11: で、その女の人は、アイヌ、北海道から出てき[て、

02 JF12: [うん.

03 JF11: 東京で、アイヌの民話とかをこう広めたいっ[て、

04 JF12: [うん.

→ 05 JF11: しっぴ、童話とかあるじゃん↑、『コロボックル』みたいな、ああいうのを執筆してて、で、なんか、東京(…), 暑いのと、ほら、体に合わなくて、あと生活習慣とかも合わなくて、18で亡くなっちゃったん[だけど.

06 JF12: [えっ↑, はやっ.

[うん.

07 JF11: [なんか結局、最終稿のなんか直しを、入れた次の日とか亡くなったとかって.

08 JF11: なんか心臓が悪かったとか言って.

09 JF12: なんかドラマチックだ[よね.

10 JF11: [うん.

両方を合わせて、「話題の提示・展開機能」(以下、機能Aと記す)とする¹¹。

3.3 機能B: 確認要求機能

(14-英語テスト) (出典: データ(1))

01 IF01: なんか友達受けたんだけどね,

02 IF02: 英語が↑.

03 IF01: 英語っていうのが、学力テストみたいなものなんだって.

04 IF02: は↑.

→ 05 IF01: だから小学校の時受けたじゃん.

06 IF01: なんか(…).

07 IF02: 何, 知能テスト↑.

08 IF01: そうそうそうそうそう.

¹¹ 曹 (2000) では、「中国語では、話し手と聞き手の間で認識のギャップが感じられない場合は、“不是…吗”を用いて、話題を切り出すことが出来ない」(p316)としている。

i) 最近って、子供の誘拐事件が多いじゃない。

ii) *最近拐骗小孩的不是挺多的吗?

というような例を挙げて説明している。しかし、実際の会話への分析を通して、“不是…吗”も「話題提示」機能を果たしているということがわかった。

(15-校服隊) (出典: データ(2))

01 C17: 你不是校服队的↑.

02 C18: 我不是校服队的.

→ 03 C17: 那, 那个志愿者服务队不也校服队的吗↑.

04 C18: 它跟校服队是分开的.

訳(01 C17: あなたは校服隊(学校の福祉サークル)じゃないの↑.

02 C18: 私は校服隊じゃないよ.

03 C17: あのボランティアグループも校服隊じゃない↑.

04 C18: あれは校服隊とは別よ.)

(16-好き) (出典: データ(2))

01 C02: 我喜欢的是TY.

→ 02 C01: 哎, 你不是喜欢MD吗↑

03 C02: MD是纯洁, 过去式.

訳(01 C02: 私が好きなのはTY.

02 C01: えっ, MDが好きだったんじゃないの↑.

03 C02: MDは純情派で, もう過去形なんだ.)

機能Aと違って、以上の例に現れた「デハナイカ」と“不是…吗”は、聞き手に確認を要求する機能を果たしている(以下、機能Bと記す)。機能Aの場合の「常識」と違って、ここでは、話し手と聞き手の間に明らかに「認識のギャップ」(曹2000)が生じており、そのギャップを解消するために、「デハナイカ」発話が用いられていると考えられる。例えば、(14)において、IF01がIF02に「友達の話では、英語のテストは学力テストみたいなものだそうだ」と話しても、IF02がよくわからなくて「は↑」と答えた。そこで、IF01が小学校の時のことを例に出してIF02にその記憶があるかどうかを確認している。

“不是…吗”に関しても同じことが言える。(15)にしても(16)にしても、情報をよりはっきりさせ聞き手との間の認識ギャップを解消するのが“不是…吗”の使用動機であり、聞き手の答えとしては、機能Aと違う「実質的な発話」が用いられている。

また、順番交替の観点から見た場合、問いかけ性の強い話し手の発話は、結果的に、聞き手を次の話者として選択し、順番交替を引き起こしている。つまり、順番交替規則の(a)が適用される。

3.4 機能C：評価・感想の表示機能

(17-方向性) (出典：データ(1))

01 JF11: しかも、戦後でやるからさ、そんなまさか松前藩に攻められたとか、そんな江戸時代の話してもしょうがないしさ。

02 JF12: また難しいことを(…).

03 JF11: へ：↑.

→ 04 JF12: まあ、いいん[じゃない, なんか.¹²

05 JF11: [でも, うん.

→ 06 JF12: 方向性が決まったからいいんじゃない.

07 JF11: そう.

08 JF12: 何かしら.

09 JF11: “何を考えてきたんですか”とか言われて、私は、もともと.

10 JF12: うん.

(18-考え方) (出典データ(1))

01 IF01: だけど、“最後は3つ、持ち駒3つになったところで、大手に受かったんですよ”って話した[ら、“俺にはできないね”とか言って、

02 IF02: [うん.

→ それは[その人の考え方じゃん.

03 IF01: [で、“何ができないんですか”って言う[て、“え、その、3社受けた後にバイトっていうのが疲れるんですか”って聞いたら、“違う”, とか言って、

04 IF02: [うん.

うん.

機能Aは話し手から聞き手に話題を提示したり展開したりするもので、機能Bは話し手から聞き手に確認を要求するものである。言わば、後ろの発話とつながりが強いという共通点がある。それに対して、(17)や(18)のような「デハナイカ」発話は聞き手の発話を受けて、話し手が自分の評価や感想を述べるものである(以下、機能Cと記す)。例えば、(17)において、JF12がJF11の述べた専門分野のことにに関してコメントを述べている。後ろの発話よりも、前の発話とのつながりが強いわけである。

そのことは、順番交替においても、前述した二機能と違うふるまいを見せていることから言える。「評価や感想を述べる」ということは、機能Bの場合の「聞き手を次の話者

¹² 表面上、「ノデハナイカ」となっているが、「(ノダ)+デハナイカ」という形態である。田野村(1988)でも指摘されている。

にする」という志向もなければ、機能Aの場合の「続けて話す」という志向も明示化されないことになる。つまり、規則の(b)と(c)が適用される。話し手が続けて話す場合もあれば、話者が聞き手に替わる場合もある。但し、いずれの場合も、前の発話と内容的なつながりを持つことで、機能AとBに区別される。

ここで中国語の例を挙げていないのは、実際の中国語データにおいて、機能Cを果たす“不是…吗”が観察されなかったからである¹³。

4 「デハナイカ」と“不是…吗”の使用頻度と機能別分布

3節で述べた基準で日本語のデータに現れた「デハナイカ」と中国語のデータに現れた“不是…吗”を機能別に振り分け、その使用頻度と共に表示すると、次の表3のようになる。

表3 「デハナイカ」と“不是…吗”の使用頻度と機能別分布

	デハナイカ	不是…吗
会話時間	187分50秒	391分19秒
出現回数	144回(100%)	80回(100%)
使用頻度	約1分18秒に1回	約4分53秒に1回
機能A(話題提示)	77回(53.5%)	28回(35%)
機能B(確認要求)	28回(19.4%)	52回(65%)
機能C(感想表示)	39回(27.1%)	0回(0%)

表3から次のことが言える。まず、日本語の会話で使われる「デハナイカ」の使用頻度は中国語の会話の“不是…吗”の3.8倍ぐらいである。そして、表現機能として、「デハナイカ」が半分以上、「話題の提供・展開機能」を果たしているのに対して、“不是…吗”は情報の確認を要求する機能の方が圧倒的に多い。また、内省では使うことができて、相手の発話を受けて評価や感想を述べる機能を持つ“不是…吗”は実際の会話において、使われていない。

用法上「確認用法」と言われてきた「デハナイカ」は会話の中で必ずしも「確認を要求している」のではなく、話題を提示し相手に自分の話を聞いてほしいという合図であったり、また、相手の話に対して自分の評価や感想を述べたりする役割も果たしている。一方、中国語の“不是…吗”は話題の提示・展開機能を果たすこともあるが、主として、聞き手との間に認識や情報のギャップが生じた場合に、そのギャップを埋める手段として用いら

¹³ 実際のデータから例が挙がっていないということと、そのような機能がありうるかどうかということとは、別問題だと思われる。例えば、相手の話を受けて、“这不挺好的吗”(いいじゃない)と評価や感想を出すのが十分考えられる。そして、データを増やすことでそのような例が現れることも十分ありうる。但し、本稿は、実際のデータを調査し、表現機能の実態を調べることを目的としている。

れる。

なぜ、形式上対応している両表現形式にこのような機能の違いがあるのか。5節でその原因を探る。

5 日中両表現形式の違いが生じる原因

日本語において、話題の提示や感想の表示は他の表現形式でも表しうるが、「デハナイカ」を用いることによって、話し手が聞き手とインターアクションを取りながら話を進めていくという姿勢を示しているのである。

一方、中国語の場合は、「“不是…吗”を用いることにより、自分の観点を相手に強く押し付けていることが感じられる」(曹泰和 2000: 326) というような主観的な解釈はされてきたが、“不是…吗”にも例(12)が示したような「話題の提示・展開機能」があるという本稿における調査結果(28回、全体の35%)が出た以上、別の角度からの解釈が求められる。

ここで、中国語と日本語の話題の提示や展開の仕方を比較し、「デハナイカ」と“不是…吗”の会話における表現機能の違いの原因について考える。

まず、日本語の会話である。

(19-友達) (出典：データ(1))

- 01 IF06: その後には、「人名6名」¹⁴とさ、「人名7姓」君がついてきたじゃん.
02 IF05: うん.
- 03 IF06: 私あの2人苦手じゃん.
04 IF05: {笑い}
- 05 IF06: 別に「IF05」が友達であることには、何の構えもないんだけど、私的には
苦手じゃん.
06 IF05: うん.
- 07 IF06: だから、うん、“この人か”.
この、気分の、こうすごい、低空飛行的な時に、“この人たちか”、みたいな.

苦手な二人という話題を提示し、展開していく過程において、IF06は3回も「デハナイカ」を用いている。聞き手であるIF05も毎回「うん」あるいは「笑い」で反応している。3.2節の例(11)、(13)と同じように、この例においても、話し手と聞き手のインターアクションがはっきりと見られた。

一方、中国語はどうであろう。次の例(20)を考察する。

¹⁴ 「人名6名」という表記は、その会話の中に出てきた6人目の人の名前という意味である。個人情報保護のために用いた表記法である。

(20-異性) (出典: データ(2))

01 C13: 其实我觉得, 我觉得, 我觉得有一句话, 那天我们上英语, 英语老师说了一句, 一个例句, 然后我当时就感触很深, 他当时说的是, “异性相吸”, 他说的异性不是男女的那个异的性别, 他说的那个性不是指的性别, 异性就是性格不同的两个人会相互吸引, 我觉得不对, 我觉得性格相同的人才会相互吸引.

02 C14: 也有相异的.

03 C13: 他的意思就是性格不同的人才会相互吸引.

04 C14: 可能是男女之间性格相异的会吸引, 就是, 感觉, 你象, 我爸就挺安静的那个, 就是这种男, 男的, 然后我妈就特别, 谁? 特别爱玩, 特别爱闹的那种性格, 然后他俩在一起了. {笑}

05 C13: 但是我觉得吧,

06 C14: 我觉得异性, 就比如说, 没有什么, 因为是异性所以没有什么隔阂, 你懂吗↑, 就直接, 他觉得她这点好, 他觉得他这点好, 就吸引了, 互相吸引了, 而同性可能象你说的.

07 C13: 嗯哼↑, 不知道, 我觉得, 你知道我是为什么会觉得同性相互吸引吗↑, 是因为我是这样想的, 往深层知识考虑, 就是我觉得人生活在社会上,

08 C14: 物以类聚↑.

09 C13: 不是, 这是怎么说呢.

訳¹⁵ (01 C13: 実は私は思う, 私は思う, 私は思う, ある言葉, この間英語の授業で, 英語の先生がこう言った, 一つの例文, それで, 私は感銘を受けた, 彼はその時, こう言った, 「異性, 惹かれあう」って, 彼が言った異性は男女のあの性別の異性ではなく, 彼が言った性は性別のことではなく, 異性というのは, 性格が異なる二人が惹かれあうという意味, 私は違うと思う, 性格が同じ人同士だからこそ惹かれあうと思う.

02 C14: 違うのもある.

03 C13: 彼は性格が異なる人同士だからこそ惹かれあうという意味.

04 C14: 男女の間は性格が異なるから惹かれあうかもしれない, つまり, 思うけど, 例えば, 家の父が静かなほうで, そういう男, 男で, それで, 母はとて, なんというか, とて, とても活動的, とて, とても活発な性格で, それで, 二人は一緒になった. {笑い}

05 C13: でも, 私は思うね,

06 C14: 私は, 異性の場合, 例えば, 何もない, 異性だからこそ隔たりがない, わかる↑, 直接的に, 彼は彼女のこういうところがいいと思ひ, 彼女は彼のこういうところがいいと思ひ, 惹かれあう, お互いに惹かれあう,

¹⁵ なるべく中国語の会話方式を再現するために、直訳している。

同性の場合は、あなたの言うとおりにかもしれない。

07 C13: うん↑, 知らない, 私は思う, なぜ私は同性が惹かれあうと思うか知っている↑, 私はこう思うから, 深く考えれば, 人間は社会で生きていくには,

08 C14: 類は友を呼ぶ↑.

09 C13: いいえ, なんて言ったらいいでしょう.)

(20) の会話例が示すように、中国語の会話においては、「英語の先生の話」という話題を提示する際も、その先生の言った言葉に対する話者の議論を展開していく際も、話し手の「一人芝居」になっているのである。一方、聞き手はというと、話し手が話している時は、黙って聞いていて、自分の意見を言いたい時に、言葉を挟む。話題や議論の展開中、日本語の会話に見られる話者間の頻繁なインターアクションは、中国語の会話において、ほとんど見られないのである。

それは、表現上、日本語は「デハナイカ」を用いて、聞き手にインターアクションを取り、聞き手もそれに応えるように「うん」などの「あいづち」を打って反応する。インターアクションと協調性が日本語の会話の特徴だとすれば、中国語の会話は話し手の一方的な話し方によって進められている性格が強いと言えよう。

結果的に、中国語の“不是…吗”は、反語文のマーカ―として機能 B(確認要求機能)のほうが主で、機能 A(話題の提示・展開機能)が少なく、機能 C(評価・感想の表示機能)は現れないという分布になっているのではないかと思われる¹⁶。

6 新たな対照研究手法の意義—日本語教育と中国語教育への示唆—

まず、次の中国人学習者の会話例を観察する。

(21—夏休み) (出典：データ(3)。Cは中国人学習者、Jは日本人母語話者)

→ 01 C: 夏休み, 一か月ぐらい, 国に戻ったじゃん.

02 J: うん.

03 C: だから(…)

→ 04 (1.0)

→ 05 J: でも国に戻ってる間↑は, まった↑く話さない日本語, 話す人がいないもんね.

この会話において、学習者Cは文法上何かを間違えているわけではない。問題は会話を円滑に進行させるという点において、Cが失敗しているということである。Cが国に戻っ

¹⁶ 言うまでもなく、「デハナイカ」と“不是…吗”の機能差異は会話の全体的なイメージの違いの一因に過ぎない。

たことは親友のJも当然知っていて、02番の「うん」からもわかるように、JはCの話の続きを待っていたわけである。03番でCの話が途絶えてしまい、04番で沈黙が発生している。会話の修復として、05番において、JはCが取るべき順番をかわりに取って会話を進めている。

以上のケースからもわかるように、コミュニケーションを重視した日本語教育において、文法的な間違いとは別に、会話を進めていく技能も教授すべきである。その基礎研究として、本稿のように、実際の会話データを用いて、インターアクションの角度から日中両言語の表現形式を対照する方法も有効ではないかと思われる。

実際、日本語学習者から、日本語母語話者の「～デハナイカ」発話に対して答えるべきかどうか分からないというような声も聞く。逆を言えば、会話の際、日本人中国語学習者が日本語の「デハナイカ」を使う感覚で中国語の“不是…吗”を頻繁に使うと、中国語らしくない会話になってしまうおそれがある。

日本語教育や中国語教育の教授法に関わる問題は、本稿の主要テーマではないので、ここでは、深く論じないが、新たな対照研究の手法で得た研究成果は、実際の教育現場に貢献できると思われる。

7 まとめと今後の課題

本稿においては、対応しているとされる日本語の「デハナイカ」と中国語の“不是…吗”を取り上げ、両者の会話における表現機能の違いを考察してきた。

まず、計量的な観点から、雑談会話データに現れた「デハナイカ」の使用頻度は“不是…吗”の4倍近くになるという結果を示した。

次に、発話順番交替規則を基準に、「デハナイカ」と“不是…吗”の会話における表現機能を三種類に分けた。データ別に集計して、「デハナイカ」は機能A(話題の提示・展開機能)が大半を占めており、“不是…吗”は、機能C(評価・感想の表示機能)の例が現れず、主として機能B(確認要求機能)を果たしているということが明らかになった。その違いの生じる原因を日中両言語の話題の展示・展開の仕方の違いから分析した。

最後に、日本語教育や中国語教育で「デハナイカ」と“不是…吗”の会話における表現機能およびその違いを教授することの重要性を指摘した。

日中両言語のその他のモダリティ形式についても、今後、本稿の研究手法を用いて、対照を行っていきたい。

参考文献

- 井上優・黄麗華 (1996)「日本語と中国語の真偽疑問文」『国語学』184: 93-106.
大西智之 (1989)「中国語と日本語の否定疑問文」『中国語学』236: 105-115.
国立国語研究所 (1960)『話しことばの文型 (1)―対話資料による研究―』秀英出版.
曹泰和 (2000)「反語文の“不是…(吗)?”について―日本語と比較しながら―」『中国語学』247:

311-327.

- 田野村忠温 (1988) 「否定疑問文小考」『国語学』152: 109-123.
- 張恵芳 (2010) 「自然会話に見られる「ダロウ」と「デハナイカ」の表現機能の違い—用法上互換性を持つ「認識喚起」の場合—」『日本語教育』145: 49-60.
- 蓮沼昭子 (1993) 「日本語の談話マーカー「だろう」と「じゃないか」の機能—共通認識喚起の用法を中心に—」『第1回小出記念日本語教育研究会論文集』39-58.
- 蓮沼昭子 (1995) 「対話における確認行為—「だろう」「じゃないか」「よね」の確認用法—」仁田義雄編『複文の研究 下』389-419, くろしお出版.
- 三宅知宏 (1996) 「日本語の確認要求的表現の諸相」『日本語教育』89: 111-122.
- 宮崎和人 (2005) 『現代日本語の疑問表現 疑いと確認要求』ひつじ書房.
- 劉雅静 (2009) 「否定疑問形「デハナイカ」の用法・機能について—中国語の“不是…吗?”との比較を通して—」『日中言語研究と日本語教育』2: 74-83, 好文出版.
- 郭继懋 (1987) 「談表提醒的“不是”」《中国语文》2: 110-113.
- 史金生 (1997) 「表反問的“不是”」《中国语文》1: 25-28.
- Jefferson, G. (1978) Sequential Aspects of Storytelling in Conversation. In J. Schenkein (ed.) *Studies in the Organization of Conversational interaction*. 219-248. New York: Academic Press.
- Sacks, H. (1974) An Analysis of the Course of a Joke's Telling in Conversation. In R. Bauman & J. Sherzer (eds.) *Explorations in the Ethnography of Speaking*. 337-353. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sacks, H., Schegloff, E. A., & Jefferson, G. (1974) A Simplest Systematics for the Organization of Turn-Taking for Conversation. *Language* 50: 696-735.

文字化記号凡例

- , ポーズ、継続を示す抑揚
- . 下降調抑揚
- 文字: 長音。前のモーラが延ばされている
- ↑ 上昇イントネーション
- [] 同時発話の始まりと終わり
- { } 非言語行動
- (数字) その秒数の間合いがある
- (()) 背景説明
- (…) 言いよどみや聞き取り不可能な部分
- 形式 注目する表現形式
- 注目する発話
- (張恵芳 筑波大学大学院生)

On the Expressive Function Difference between “*de wa nai ka*” and “*bushi...ma*” in Natural Dialogue

Huifang ZHANG

The motivation or the effect of expression in the flow of dialogue is defined as expressive functions. The purpose of this paper is to clarify the difference of “*de wa nai ka*” and “*bushi...ma*” in natural dialogue. Three types of expressive functions are proposed in this paper based on the basic rule of turn-taking system: A, the function of providing and expanding topics; B, the function of seeking confirmation from; and C, the function of comment of sentiment expression. The frequency in use of “*de wa nai ka*” in natural dialogue between young women is four times of that of “*bushi...ma*”, and most of the use belongs to function A. For “*bushi...ma*”, function C does not appear, but function B that is mainly used. This paper analyzes the causes of the difference of expressive function between Japanese and Chinese from the perspective of topic proposal and expansion. It also suggests that teachers in Japanese and Chinese language education should explain to the learners about the main functions of “*de wa nai ka*” and “*bushi...ma*”. The study method adopted by this paper is a new trial for the contrast of modality between Japanese and Chinese.